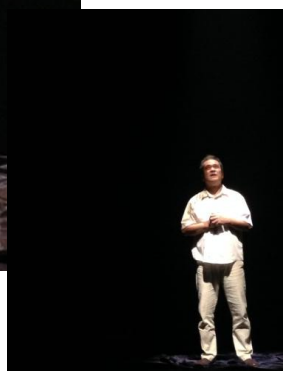
一人芝居　「平和…そして命ありて」

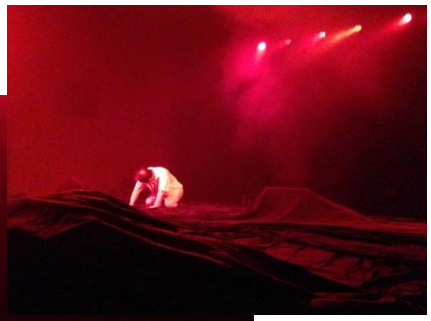
原作：渡辺　司　／　出演・脚色：川下　祐司

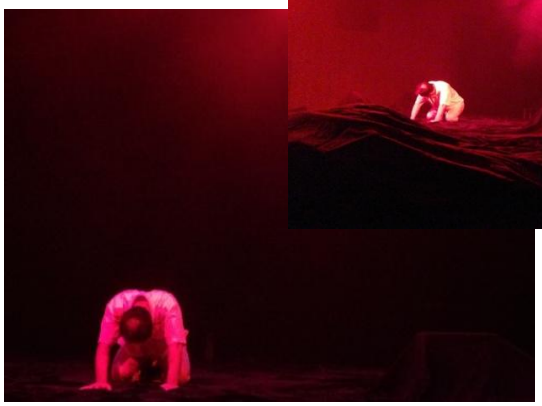


一人の男、被爆二世の川下祐司が舞台に上がる

みなさんと平和のことを考えるために…
そして、この一人芝居「命ありて」を残してくれた故・渡辺司さんの遺志を伝えるために…

暗闇と共に、時は昭和20年8月9日へと引き戻される
舞台には、学徒動員に行こうとする「あの日」の渡辺少年が立つ





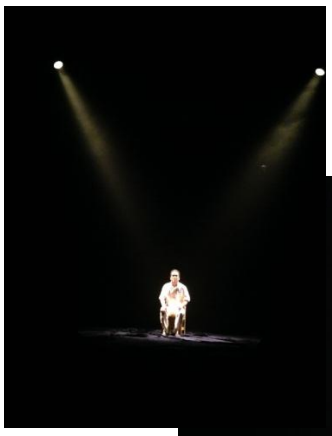
そしてその時が来た。
11時2分…閃光と共に原子爆弾が炸裂

命からがら逃げてきた渡辺少年は、呆然と
下界の火の海を見つめている。

「一体どれほど多くの人々がこの炎の中で、
生きながら焼かれていることか。
この火の海は、同じ悲劇を何千何万と飲み
込んでいったに違いない。
とめどもなく涙が溢れてきた。
涙が溢れてきた。」

Actor

黒こげになって倒れている人。
動かなくなった赤ちゃんを抱いた血まみれの女の人。
「水ば…水ば…」「助けて」…あちらこちらで苦しんでいる人々。
そして、渡辺少年の手の中で亡くなっていった魚屋のおばちゃん。
若干13歳の渡辺少年は原爆投下直後の長崎を生きていた。



原爆投下から９日後の8月19日の夜
のどが腫れ、発熱。翌朝には40度の発熱とひどい下痢の症状に侵される。
ピカドン病だ。
医師から、あと2，3日の間に死ぬと死の宣告を受け、絶望の淵へ落とされる渡辺少年。

「母ちゃん泣かんで、絶対死なんけん。…指切りゲンマン、
嘘ついたら針千本飲ます…
母ちゃん…母ちゃん…」

なんとか生還した渡辺少年は、病魔と闘いながら訴え続ける
「それは、あまりにも惨くて、未だ思い出したくない。
それは、あまりにも悲しすぎて、今も口にしたくない。
しかし、原子爆弾がもたらした、この惨くて悲しい事実は決して歴史の闇に葬り去ってはならん。
この原子爆弾が憎か。
それにもまして、この原子爆弾を使うようになった戦争が怨めしか。
戦争さえなかったら…」

Actor